

見方・考え方を育て機能的に言語運用する語彙指導の研究 — 継続した言葉の収集と個人文集作りを通して —



木更津市立請西小学校教諭 さこだ 迫田 なおや 直哉

1 研究主題について

新学習指導要領では、語彙指導による言語活動の質の向上が求められている。本研究では、実生活で生きて働く言葉の力を質と量の両面から捉え、以下の2点を目指して語彙指導を設計した。(1)言葉による見方・考え方を働かせ、場に応じて機能的に言語運用する力を育成する。(2)着実に語彙の量を増やすとともに、言葉への信頼感や有用感を高める。

2 研究の実際

(1)語彙指導カリキュラムの設計

語彙の量を着実に増やし、機能的に言語運用する力を育成するためには、日常の言語生活の中で言葉を意識する構えを作り、計画的に継続して指導を積み重ねる必要がある。そこで、短作文による個人文集作りと言葉の収集とを適宜連動させながら並行して展開する語彙指導カリキュラム(図)を設計した。



図 語彙指導カリキュラム

(2)新聞を活用した言葉の収集「ことバンク」

「ことバンク」は、言葉の収集を貯蓄になぞらえた学習である。スクラップした新聞記事から選んだ言葉を視写し、言葉の意味・類義語・対義語調べや短文作り等をする、学

びに応じて通帳を模したノートにワードマネー【G(ゴイ)】が付与される仕組みである。以下3点の手立てを適宜とりながら行った。①記事を自由に選べる環境作り。②取組を共有する掲示物作り。③貯まったワードマネーで「先生方が大切にしている言葉シールと解説文」が当たる「語チャポン」を回せる企画。これらによって、児童は意欲を持続し、言葉への意識を高めながら着実に語彙を蓄積することができた。

(3)短作文による個人文集「12歳の大自典」

「12歳の大自典」は、短作文を積み重ねて作る個人文集である。短作文のテーマは、深化・拡充をねらう語彙、話題や文種、育成する見方・考え方や言語運用等を整理し、児童の言語生活を基盤として【①私にとっての秋 ②校歌と私 ③12歳のお悩み相談室 ④私ならこう褒める ⑤私を支える言葉 ⑥私の名前】の六つを設定した。書く際は、構想段階・記述段階・推敲段階に重点を置いて語彙指導を行った。構想段階では、多面的な見方・考え方につながる語彙を資料や副題で提示し、発想を促した。記述・推敲段階では、教師モデルや語彙表を活用し、文脈に応じた言葉を適切に選択し機能的に運用する一助とした。

3 研究のまとめ

児童の振り返りには、場に応じて言葉を使い分けることの大切さや言葉のもつ奥行きへの気付き、言葉と豊かに関わる自分を肯定的に捉える感想等が見られた。今後も、児童の言語生活とのつながりを見据えた計画的・継続的な語彙指導の在り方を考えていきたい。

道徳的判断力を高める指導の工夫 —現代的な課題を取り上げた教材開発と授業実践を通して—



香取市立小見川中央小学校教諭（前香取市立津宮小学校教諭） おおかわ たまよ 大川 珠代

1 研究主題

道徳科の目標は道徳性を養うことであり、道徳性は道徳的判断力、心情、実践意欲と態度の諸様相から構成される。グローバル化が今後一層進展する中で、多様な文化や価値観をもつ人々と関わり、共生していくことが課題とされる中、自ら考え判断していく道徳的判断力の育成がこれまで以上に求められている。そこで、現代的な課題を取り上げた教材開発及び児童が多面的・多角的に考える授業実践を行い、道徳的判断力の高まりへの効果を明らかにしたいと考え、本主題を設定した。

視点から多面的に考えるために、思考ツール（ウェビング・Xチャート・コンセプトマップ等）を活用した。それによりそれぞれの立場の考えを可視化し、問題を多面的に捉えることができるようにした。

②問題解決的な学習

教材をもとに児童が問題を把握し、問題の解決に向けて友達と話し合い、自己決定をする授業構成にした。自他の考えを比較検討し、再考する。その上で自己決定をし、振り返りをする学習を積み重ねることで道徳的判断力を高めていく構造である（図）。

2 研究の実際

(1)現代的な課題と教材開発について

現代的な課題とは、葛藤や多様な見方・考え方があり、一面的な理解では解決できない課題である。教材開発は、身近な社会的課題を取り上げて行った。「現代的な課題」と開発教材の概要は次のとおりである。

- ①「防災教育」…災害時の避難所におけるベットの扱いを巡る問題について考える。
- ②「超高齢社会」…高齢者の運転免許返納に関わる問題について考える。
- ③「伝統文化教育」…地域の伝統芸能の継承に関わる問題について考える。

その他、「多文化共生社会」「人権教育」を合わせて5実践を行った。

(2)多面的・多角的に考える学習について

現代的な課題は答えが一つではなく、多面的・多角的に考えることが重要である。本研究では、次の二つの手立てを講じた。

①思考ツールの活用

道徳的な問題を教材に関わる複数の立場や

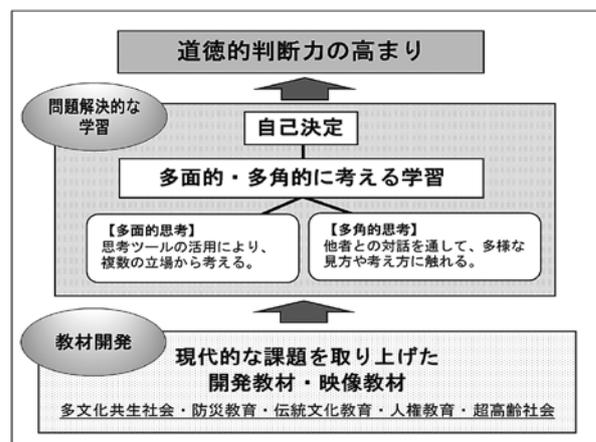


図 研究の全体構造

3 研究のまとめ

「道徳性アセスメントHUMAN」を用いた分析の結果、様々な問題場面において周囲のことを考え、どのように対処するかを道徳的に判断する力が高まったことが分かった。問題解決的な学習や思考ツールを用いた指導の工夫が多面的・多角的に考える力を伸ばし、道徳的判断力を高めることができた。なお、開発教材及び指導案等は、センターWebサイト「wakaba」からダウンロードが可能である。

目的に応じて表現方法を選択できるようにするための「比例と反比例」の指導 —題材の精選、ふきだしの活用、伝え合う活動に着目して—



流山市立南部中学校教諭（前流山市立常盤松中学校教諭） あさぬま 浅沼 かつとし 克俊

1 はじめに

本校の生徒は、知識や技能の定着は図れているが、表、式、グラフの特徴やよさを理解すること、特に表を用いて問題を解決することに課題が見られた。そこで、これらの表現方法を目的に応じて使い分けられるようにしたいと考え、本主題を設定した。

2 研究の実際

(1)題材の工夫と精選

第1学年「比例と反比例」において、表現方法の特徴やよさを実感できる題材を授業に取り入れた。ある変域には増減がない問題（図1左上）に取り組みさせることで、生徒は変化の様子を数値で確認できる表や、全体の傾向が一目でわかるグラフのよさに気付くことができた。

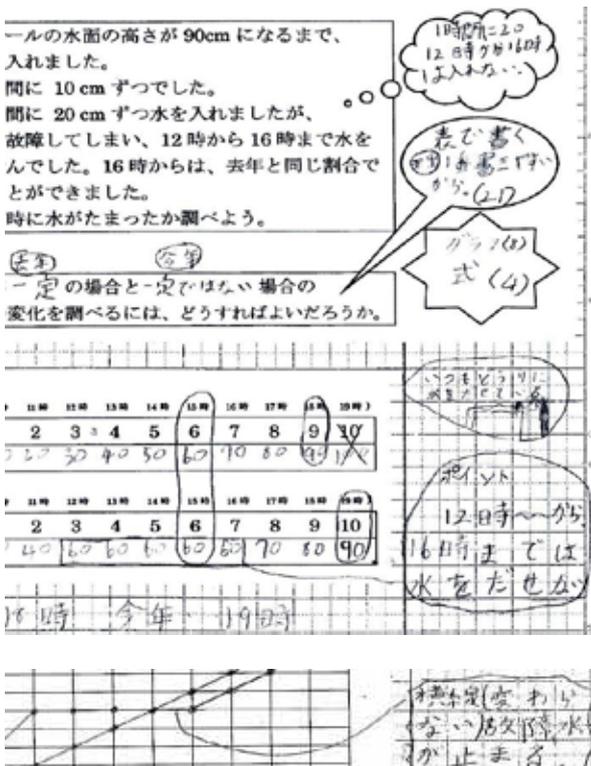


図1

(2)伝え合う活動の工夫

問題のイメージや疑問、自分の考えや他者の考えを表出する手立てとして、ふきだしを活用した。ふきだしの形式は「問題の理解」、「自分の考え」、「他者の考え」で区別した。（図2～4）

ふきだしに端的に表すことによって、生徒は自分の考えの変容や他者の考えのよさを確認することができた。また、問題文や、表、グラフの対応する部分と結び付けることで、お互いに説明することが容易になり、伝え合う活動がより活性化した。単元の後半では、要点を簡潔にまとめ、他者の考えに対する自分の考えも記述できるようになった。



図2 問題の理解で書くふきだし



図3 自分の考えを書くふきだし



図4 他者の考えを書くふきだし

3 研究のまとめ

題材の工夫と精選により、問題から求めたいものと表現方法に対応付けられるようになり、表現方法のよさや特徴についての理解が深まった。ふきだしを活用した伝え合いが、自他の思考を振り返り、用いる表現方法の選択肢を広げることにつながった。今後は、今回得た成果を他領域での学習に生かすとともに、ふきだしの活用を含め、生徒同士が、より一層活発な意見交換ができるように指導法を工夫したい。

詳細は、総合教育センターのWebページをご覧ください。

高等学校における国際理解を視野に入れたアジアの諸民族の音楽についての教材化に関する研究 —生徒の実感を伴った音楽体験を目指して—



県立茂原高等学校教諭（前県立千葉商業高等学校教諭） いわがみ まゆみ 岩上 真弓

1 はじめに

世界に広く存在している民族音楽には、その土地の風土、歴史、人々の生活や習慣が色濃く映し出されている。本研究は、アジアの諸民族の音楽についての学習を通して、文化の違いを理解し、尊重する態度を育てることを目指した。そのために、以下の2点を踏まえて、学習過程を構築した。(1)歴史的・文化的背景についての学習を取り入れる。(2)体験活動を通して、実感をもって音楽の特徴を捉えられるようにする。

2 研究の実際

(1)歴史的・文化的背景の学習

はじめに、アジアを中心に世界の諸民族の音楽を鑑賞した。さんしん ひちりき しのか三線、鞆、篠笛、ティンシャ、中国笛などは実物を用意し、音色を聴かせることで、それぞれの楽器や音の特徴を考えることができた。

次に、シルクロードについて学習した。生徒は、交易路を通して音楽が繋がっていること、歴史と深いつながりがあることに気付くことができた。

(2)月琴の演奏、歌唱「茉莉花」

月琴は東アジアの弦楽器で、中国の宋代以降、みんしんがく明清楽で使用され、日本伝来は江戸時代である。明治中期には庶民の間でも流行し、琉球でも演奏されていた。



授業で生徒は、100年以上前の上りの実際の楽器を演奏した。初めて手に取る貴重な楽器を演奏することで、楽器の素材や形状、音色や演奏の仕方等について、既知の

楽器との共通点や相違点を考えることができた。チューニングや取扱いの難しさをあげる声もあったが、「神秘的な印象のある音色だった。」「沖縄の音楽を弾きたい気分になった。」「ウクレレやギターと違う響きをしていて文化を身近に感じることができた。」等、音の響きを味わい、音色の特徴を感じ取り、文化の違いやつながりに想像力を働かせることができた。

最後に、月琴の伴奏に合わせて「茉莉花」を歌った。「茉莉花」は中国で親しまれてきた代表的な曲で、旋律と中国語の特徴を味わいながら表現活動を行うことができる。生徒は、歌唱と月琴の演奏に分かれて練習した。練習後は、「韻頭」の数字譜に付された中国語の読み仮名を、口唱歌で歌う生徒も見られた。歌詞の内容を踏まえ、中国語の雰囲気も味わうことができた。

3 おわりに

授業後、生徒からは「船や飛行機が発達していない時代でも、世界は道でつながっていて、楽器にもそれが表れている。」「歴史の流れとともに音楽のことが学べて良かった。」といった声が聞かれた。鑑賞、器楽演奏を通して、生徒は、アジアの音楽の特徴やイメージを実感することができた。

また、「音楽を通して世界が分かることってすごくいいな。」という生徒も見られた。「音楽に国境はない。」と言われるように、私たちは日常様々な音楽に触れることができる。生徒が実感を伴って民族音楽に親しむことで、それぞれの文化の違いを理解することができた。また、文化のつながりを考えることが、お互いの文化を尊重する態度を育成する一助となることが分かった。